



半実在青少年  
ふいる太



「お前の母ちゃんOpenGLー！」

「くやしかったらなんとか言えよ、アニメ声だよ！」

いかにも健康そうな七分丈パンツ少年のサッカーボールキックが捉えたものは白黒の物体。  
いや、人体だ。

上から下まで真っ黒なトレーナー、長ズボン。肌は白、瞳は漆黑。頭髮だけが銀に近い白。

「おい！ 起きろよこのバーチャル太郎！」

「……」

慌ててサッカー少年たちに声をかける。

「き、きみら、ちょっとやりすぎじゃ……」

「ア？ なんだよオマエ、どこ中よ」

「いや、あんまりひどくやると死んじゃったりしないかなーと……」

サッカー少年たちは、異世界からやって来た環境保護団体にモンスターの虐殺を戒められた勇者一行のような顔をした。

「あー、ゴツちゃん、こいつアレだ、先週転校してきた」

「そーかそーか転校生か。ちょうどいいや、こっちこいって」

「わっ」

「まーちょっと一発蹴ってみ？ な？」

「いやちょっとおかしいでしょさすがに」

「いいんだって！ こいつなんかキモいし、人権ねーから大丈夫」

もう一発蹴りを脇腹に入れられ、声もなくうめく白黒の少年。

その瞳はぼくを見上げているようで、何も見ていないようにうつろ。

目が合う。

「いやいやいや、蹴るって、ちょっと、それはちょっと」

「なんだよツマンネーやつ！」

「もしかしてこいつも『半実在』なんじゃね？」

「なんだよナカマだったのかよ、道理でかばうとおもった！」

「道理で」

「どうりで！」

「……ちょ、いや、ちが、わー！！」

たちまちぼくは円陣の中にひきずりこまれ、これまでの優等生人生ではついで体験することの

なかった貴重な経験をさせていただくことになる。

これがぼくと、「バーチャル太郎」「嘘太郎」こと「上村ふいる太」との出会いのおはなし。

こんじょうが 3 あがった！

女子と二人で帰ろうとしていたふいる太を見つけた。  
なんだ、ふいる太にも友達とかっているんだ。

確かにふいる太は外見と声以外はごくごくふつうで、無口だったけどマンガやゲームのことに關しては詳しかった。

「ふいる太はマンガに造詣が深いね」と褒めると、「キミ、『造詣』ということばはそんなサブカルチャー的なものに対して使う言葉ではないね」とか生真面目な顔で言うのが最初はおもしろかったが少し鬱陶しかったのでいじめっこの気持ちもわからないではない、とひとり納得したりもした。

「ふいる太一、今週末の公開授業ってなんだろ」

それでもぼくからすると、ふいる太は少し珍しい外見というだけで2.5次元野郎とかいう誹謗中傷をうけて傷ついているのだと思えたし、そもそも外見や先入観で人を差別するのはとてもみっともないことだ、とうちの両親がいつも口を酸っぱくして言っていたのだった。まともな両親だとは思いますが、謎のボランティア活動で土日家を空けたりすることがおおいのはなんとかしてほしい。

「授業参観みたいなものさ、くだらない」

「参観かー。そりゃ確かに小学生じゃあるまいし、っていう話だよなー。アレだろ、母親がずっと並んで教室中が化粧臭くなって頭クラクラして答えるどころじゃねーってのに後ろから『マスザマス！ 井伏はマスジザマス！』とかって、そういやふいる太のともも母ちゃん来んの？」

「母さん、ね……」

どぐっ

「かあっ……」

「こらあっ、ふいる太はお母さんいないんだからそんな話したらだめでしょうが！」

いじめられサイドに落ちたことも初めてなら、女子に腰の入ったボディーブローをもらったのも初めてだ。

しかもこんなロングヘアでほっそりした、お嬢っぽい体のどこからこの威力が……。

「いや、別に母さん……」

「庇うことないんだからね、こんな無神経な男」

「いやいやいや、無神経もなにもこないだ転校してきたばかりでそんなこと知るわけないだろ、いきなり殴るかフツー？」

「わたしに怒鳴る前にふいる太に謝るのが先でしょ！」

「なに……いやそれはそうか。ふいる太、ごめんな、そうとも知らずにぼくは無神経なことを……。バカなぼくを許してくれ」

「いや、別に……」

「じゃあその暴力女子」

「ちゃんと綾瀬って名前がありまーす」

「じゃあ綾瀬さん、今度はお前が僕に謝ってくれよ」

「蚊を叩き潰してあやまる人間はいませーん」

「虫扱い！」

「ぶんぶんうるさいからぴったりでしょ！　そもそもアンタどこまでついてくんの！　はいここでウルトラ見えないあみ〜ど〜」

「だから虫じゃねーっつの！　今日はふいる太の家に寄って約束してたんだっつーの、な、ふいる太！？」

「本当に〜？」

「ん？　ああ、そうだっけ」

ふいる太の家につき、ようやくうるさい女子は隣の家に入っていった。

「しかし隣の幼なじみとはな一。とことん現実味ないやつだねふいる太って」

「よく言われる」

二階のふいる太の部屋に上がると、フローリングで真っ白な壁紙に無印っぽいデスクとベッド。それ以外、なにもなし。

「逆にすげー」

「なにがさ」

「マンガとかないのかよ」

「ああ、マンガ。こないだ読んだやつ、ちょうど売ったところでね」

ベッドに腰掛けたものの、何もなさすぎて視線のやり場にこまる。

するとめずらしくふいる太の方から口を開いた。

「ときにキミ、約束もなく約束があるとブラフを打ってついてきたのはなにか用件があったのこのかな」

「いや、そういうわけじゃ。ま一転校早々浮いちゃったこともあるし、他に遊ぶ相手もないしな、と思って」

「そうか、僕のせいだな。謝罪しよう」

「いやいやいや、そういうんじゃない。これでふいる太とまで空気悪くなったら誰と遊べばいいのさ、やめてやめて」

「なるほど、キミはコムサイドの人間なのかな？　それにしても比較的ロジカルであの綾瀬にも遠慮無く物を言うし、好感が持てるね」

「おほめいただき。よくわからんけど」

ぼくらはそれからいろんな話をした。

ふいる太は突然電源が落ちたようにぼーっとすることがあったし、相変わらず神経を逆撫するような言い方をすることもあったが、慣れればそうそう気になるものでもなかった。

「で、綾瀬とは付き合ってるの？」

「向こうはそうしたいらしいが、おすすめできないね」

「なんだその余裕！ よゆうすぎる！」

「僕と深く関わってもあまりメリットはないと思うが、なかなか理解を得られない」

「メリットもなにも、ふいる太って結構イケメンだし、彼氏だったら自慢になると思うけどなー」

「イケメンかどうかはよくわからないが.....キミもそう思うのか？」

「まーそう思うヤツがおおいんじゃない、って話ですよ」

「キミの個人的見解としては？」

「イケメンはキャラクターメイキングのポイントを外見に振り分け過ぎてるから他の能力は低いはず！」

「とことんゲーマーだな」

フッ、と笑ったような気がした。

「では、キミのことを信用して頼みごとをしてもいいか」

ふいる太は、見たことのない携帯端末を開いた。